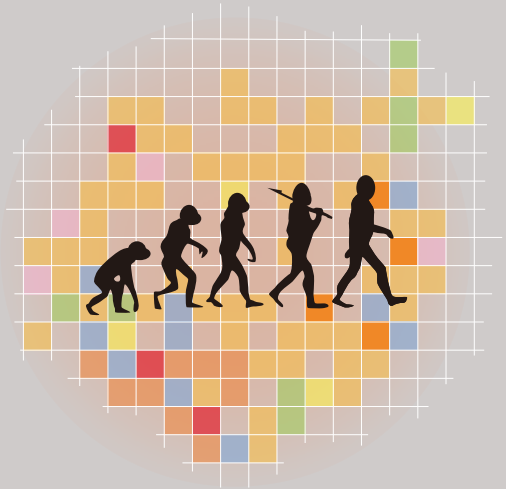
■主催：公益財団法人 花王 芸術・科学財団
http://www.kao-foundation.or.jp/

公開シンポジウム「これからの家族を考える」
シリーズ第２回

進化して いるのか 家族



公益財団法人 花王 芸術・科学財団

公開シンポジウム
「これからの家族を考える」
シリーズ第２回

2017年11月17日（金）18:30〜20:30

SMBCホール
（東京都千代田区丸の内 1-3-2　三井住友銀行東館ライジング・スクエア3F）

主催　公益財団法人 花王芸術・科学財団

進化しているのか家族

目次

プロローグ（p2〜p3）
「家族とは何なのか？」
東京大学名誉教授　原島 博

基調講演（p4〜p13）
「人間家族の由来と未来 ー ゴリラからＡＩまで」
京都大学総長・霊長類学者・人類学者　山極 寿一

パネルトーク（p14〜p24）
山極 寿一 × 大橋 未歩 × 原島 博（コーディネーター）

プロローグ

「家族とは何なのか？」

東京大学名誉教授
原島 博

■「家族」は人にとって最大の関心事

原島でございます。今日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。このシンポジウムのコーディネーターをしております。その責任上、プロローグにタイトルをつけさせていただきました。「家族とは何なのか？」です。けれど、今このことについて結論を出すつもりはまったくございません。もしこの 15 分で結論が出てしまったら、このあとシンポジウムが続きませんし、次回も必要なくなってしまいますから。

正直、この「家族」というのは、きわめて難しいテーマです。なぜかというと、たとえば、わたしの家族にこの話をしたら、「家族のことをまったく考えてこなかったあなたが、どうしてそんなことをやるの？」と言われてしまいました。このように、常に“反省”がつきまとうテーマなのです。

また、家族というのは基本的に、自由に選べません。たとえば親子関係。子どもは「この親はいやだ」「この親のほうがいい」という形で生まれてくるわけではありませんし、親子関係は解消できません。夫婦関係は選べるではないかとお思いになるかもしれませんが、これもそう簡単には解消できません。解消できないから、いろいろ悩みがあるわけです。要するに、勝手に自由に選べないのが家族であり、したがって、家族はしがらみになると思われる方も、けっこういらっしゃると思います。

一方で、「家族は大切」「家族は絆」と思われる方も多いと思います。家族は、人が人と生活する最小単位です。家庭には自分の居場所があるという気持ちをお持ちで、ホッとする方もおられるでしょう。トイレだけが自分の居場所ではないのですね。さらに言えば、自分たちはいいけれど、せめて子どもには、いい家庭で育ってもらいたいと願っている方も多いでしょう。

子どもを基準に考えたとき、やはり家族は重要です。

このように、家族は「しがらみ」でもあるし「絆」でもあるということで、前回のシンポジウムでは脚本家の山田太一先生に、「宿命としての家族」というテーマでお話しいただきました。わたし自身、山田先生のお話をお聞きし、かつ、その後のパネルトークにも参加させていただいて、家族の問題というのは「こうあるべきだ」と上から目線で議論し、押しつける話ではないのだと思いました。人がそれぞれ違っていていいように、家族もそれぞれ違っていていいし、理想の家族なんてないのかもしれません。ただ、それだと議論はそれで終わりになってしまいます。では、なぜこのシンポジウムで 3 回にわたって家族をテーマにするのか。それはやはり、家族は人にとって最大の関心事だからです。

■家族のルーツにさかのぼって考える

家族とは一体何なのでしょう。どうして家族は最大の関心事なのでしょうか。もしかしたら人間の遺伝子に、「家族の大切さ」というものが書き込まれているのかもしれません。あるいは、家族とは人間が作った社会的な仕組みだという面もあるかもしれません。それぞれの社会によって家族の形態は違うし、時代によっても違います。でも、家族が人間の遺伝子に書き込まれ、人間の本質なのだとしたら、家族のルーツとは一体何なのでしょう。遺伝子に書き込まれているとしたら、いつ書き込まれたのでしょうか。

そういうことを踏まえて家族のルーツにさかのぼって考えてみようということになり、今回、山極先生にお願いすることになったわけです。2003 年に「社会の中の睡眠」というテーマでシンポジウムを行ないましたが、山極先生にはこのときにも、「類人猿の眠りと人の眠り」というテーマでお話しいただきました。

今回、山極先生には「人間家族の由来と未来」というタイトルをつけていただきました。「ゴリラから AI まで」というサブタイトルがついております。実は京都大学の霊長類研究所に「アイちゃん」というチンパンジーがおりまして、最初わたしはそのアイちゃんの話かと思ったら、どうも AI（人工知能）ということでございます。現代社会におけるこれからの家族はどうあったらいいのか、果たしてこれでいいのかというところまで、お話しいただけるのかなと期待しております。よろしくご静聴をお願いいたします。

基調講演

「人間家族の由来と未来 ―ゴリラからAIまで」

京都大学総長・霊長類学者・人類学者
山極 寿一

■家族とは人間社会だけの普遍的な現象

みなさん、こんばんは。わたしは40年近くゴリラの研究をしてきました。そのテーマは一貫して「家族の由来を探る」ということです。今日はその中から少し大きなトピックを扱いたいと思います。

家族とは、人間社会だけの普遍的な現象なんです。でも、人間だけじゃないと、みなさんは考えておられると思います。確かに鳥にも、生涯ペアを作って暮らす種類がいるし、オオカミやキツネは夫婦仲睦まじく暮らします。これらも、形としては人間の家族に似ています。だけど、背景が違うんです。

鳥は子どもをおなかの中で卵として育てますが、卵は数時間から数日で体の外に出てきます。その卵を温めるのは、別に母親でなくてもいいんです。父親でもいいし、人間が温めても孵化します。でも人間は哺乳類だから、おなかの中で何カ月も子どもを胎児として育て、生まれてからも、お乳をやり続けなければなりません。背景が違うんです。

夫婦が協力して子どもを育てるオオカミやキツネも哺乳類じゃないかとおっしゃるかもしれません。しかし彼らは肉食動物です。肉食動物は胃の中に食べ物を長時間保存していられるので、つかまえた獲物の肉をいったん飲み込んで、それを安全な場所に隠れている子どもたちに吐き出して与えることができる。しかも、毎日食べる必要がありません。でも人間はサルや類人猿の仲間なので、毎日食事をしなければいけない。ただ、夫婦共同でそのように子どもを育てるというのは、ものすごく大変なことなので、実はサルや類人猿には、人間の家族のようなものはありません。家族は、人間にしかないんです。

さらに人間の特徴は、単体ではなく複数の家族が集まって共同体を作る、いわば二重構造を持っていることです。これがないと人間の家族ではありません。共同体を中心に、食物を共同で生産し、分け合って食べる。子育ても共同です。家族単体ではできないから、共同で行なう。このようにして人間の家族という形態が生まれたのだと思います。そして、これを維持してきたのは高い共感力です。共感力とは、人々の心を感じ、読むという能力です。

では、サルや類人猿と共通の祖先から出発したはずの人間の家族は、どのような必要性から生まれたのでしょう。家族が作られるにあたり、どのような背景や条件があったのでしょう。これを探るのが、わたしの仕事なんです。

■人間の赤ちゃんは不思議な特徴を持っている

その前にみなさんは、ゴリラはサルだと思っているかもしれませんが、サルではありません。ゴリラはヒト科（Hominidae）という分類群に属します。オランウータン、チンパンジー、ゴリラはヒト科に属する類人猿で、遺伝子で言えばヒトと1.2%から1.6%ぐらいしか違いません。でもサルはヒトや類人猿と3%以上違います。ですから、サルとゴリラの違いのほうが、ゴリラと人間の違いよりも大きいと考えてください。

人間の祖先はゴリラやチンパンジーと同じような特徴を持って出発しましたが、彼らとは違った特徴を発達させて、現代まで至っています。その途中のどこかで、家族と共同体というものが出てきました。

ゴリラやチンパンジーは、アフリカにしか住んでいません。そこは熱帯雨林で、緑が一年中豊かで、フルーツなどのおいしい食べ物がある場所です。彼らはいまだにその場所から出ていません。人間の祖先も同じ場所で、おそらく同じような暮らしをしていたでしょう。でも人間の祖先は、あるときから世界中に分布域を広げるようになりました。その違いが、子どもの成長と子育てに表れています。そして、そこに家族の秘密が隠されています。

ゴリラと人間を比べてみましょう。ゴリラの子どもは、生まれたときはものすごく小さいんです。ゴリラは成熟すると、オスは200kg、メスも100kgを超えます。でもゴリラの赤ちゃんは1.6kgから1.8kgしかない。人間の赤ちゃんは3kgを超えるから、それに比べるとはるかに小さいですよね。

ゴリラのお母さんはお乳をすくなくとも3年間与え、赤ん坊を1年間は腕の中で育てます。赤ん坊は、いっときたりともお母さんの腕から離れない。だから、ゴリラの赤ちゃんは泣きません。最初はお母さんだけが育てますが、お乳以外のものを口に含み始めると、お母さんは赤ちゃんをお父さんの元へ連れていきます。そして子どもを預け、さっさと自分のエサを食べに

行ってしまう。お父さんのまわりには、複数のお母さんから“委託された”子どもたちが群がっていて、まるで保育士さんのようです。お父さんは背中が白く、これは「シルバーバック」と呼ばれるのですが、とても上手に子どもたちを育てるんです。このように育てられるゴリラの子どもと比べると、人間の赤ちゃんは、不思議な特徴を持っています。

まず人間の赤ちゃんは大きい。そして、まったく泣かないゴリラの赤ちゃんとは違い、けたたましく泣きます。同時に、ニコニコ笑ってくれます。体重が重いと言っても、成長してから生まれたわけではなく、とてもひ弱で、自力ではお母さんにつかまれません。そして、成長が遅いです。ゴリラの赤ちゃんは５歳で 50kg を超えますが、人間は５歳でも 20kg を超えません。それにもかかわらず乳離れは早く、１歳や２歳でお乳を飲むのをやめてしまう。ゴリラは３歳や４歳になるまでお乳を吸っています。なんだかおかしいですよね。なんか、ここで変なことが起こっているような気がします。

実はオランウータンは、７年間もお乳を吸います。チンパンジーも５年。人間の子どもだけが１年から２年でお乳を吸うことをやめてしまう。それにもかかわらず、６歳にならないと永久歯が生えてきません。オランウータン、ゴリラ、チンパンジーは、もっと早く永久歯が生えてきます。つまり、彼らは離乳するころには永久歯が生えているので、大人の食べ物が食べられます。でも人間の子どもの離乳後に生えてくる乳歯は、エナメル質が薄くて華奢だから、大人と同じものが食べられません。人工的な離乳食が豊富な現代とは異なり、農耕や牧畜が始まる前の人間は自然のものを加工して食べていたので、子どもに与える食べ物には苦労したはずです。だから、たとえば蜂蜜とか、特にやわらかいフルーツとか、特殊なものを取ってきて与えなくてはならなかった。どうして、そのような手間をかけなくてはならなかったのか。人間の子どもも、６歳までお乳を吸っていたっていいじゃないですか。どうして人間の赤ちゃんは、早く離乳してしまったのか。それは、人間の祖先が熱帯雨林から抜け出したことに起因します。

■子育ては家族を超えて共同で担うようになった

人間の祖先は熱帯雨林から徐々に木のない草原、いわゆるサバンナへと出ていきました。一年中食物がある熱帯雨林とは異なり、サバンナで人間は、食物を得るのが難しいという事態に直面します。そういうときに有効に活用できたのが、立って二足で歩くという能力です。これは人間にしかない能力です。それによって遠くまで移動して食物を得、両手で安全な場所に運び、仲間と一緒に食べることができました。

人間はまた、大型の肉食動物に狙われるという危機にも直面しました。熱帯雨林では動物に襲われたら、木の上に登って安全な場所に隠れればよかった。ところがサバンナでは、隠れ場所は限られます。そのうえ肉食動物が狙うのは、つかまえやすく、おいしい幼児です。

基本的に肉食動物の餌食になる動物たちには、逃げ足が早いなど、特定の特徴があります。そのひとつが、子どもをたくさん持つ、いわゆる多産です。多産を達成するには２種類の方法があります。ひとつは、７頭や８頭の子を持つイノシシのように、一度にたくさんの子どもを産む方法です。もうひとつは、シカのように出産間隔を縮めて何度も続けて産む方法です。人間は、後者を選びました。

出産間隔を縮めるためには、赤ちゃんを早くおっぱいから引き離さなければいけません。そして、赤ちゃんがおっぱいを吸わなくなって約２週間で、お乳は止まります。お乳が出ている間は、プロラクチンというホルモンが分泌されて排卵が抑制されますが、お乳が止まるとプロラクチンの分泌が止まり、排卵が回復し、次の子どもを産む準備ができる。こういうことを、初期の人類はやっていたに違いないのです。

ではなぜ、人間の子どもの成長は遅いのでしょう。それは、200 万年前に人類の脳が大きくなり始めたことと関係があります。人類の赤ちゃんの脳は生後１年間で２倍という、ものすごい速さで成長します。５年間で大人の 90%に達し、12 歳から 16 歳で、大人と同じ大きさになります。脳はものすごくエネルギーを必要とする器官ですから、過大な栄養が必要で、脂肪を燃やして脳に栄養を供給するため、赤ちゃんは分厚い脂肪に包まれて生まれてきます。ゴリラの赤ちゃんは体脂肪率が 5%以下でガリガリですが、人間の赤ちゃんがまるまる太っているのは、栄養の供給が滞ったときに脂肪を燃やして脳を守るためです。また、脳に多くのエネルギーを送り続けるために、本来は身体に回すべきエネルギーを脳に回しました。だから人間の子どもは、身体の成長が遅いのです。

脳の成長を優先させることは、人類進化のある段階から起こりました。生後に脳にエネルギーを回すと身体の成長速度は下降しますが、12 歳から 16 歳で脳の成長が止まると、今度はエネルギーを身体に回すようになって身体の成長のピークが訪れます。このピークは女子のほうが男子より２歳早く、男子のほうが高いという特徴を持っています。そして、この、脳の成長に身体が追いつく時期を「思春期スパート」と呼びます。人間は、思春期スパートの時期に繁殖力が急速に身につきます。同時にこの時期は、学習によって社会的な能力を身につける期間でもあります。

人間の死亡率は生まれた直後は高いですが、生後に親の目が行き届くと下降します。10 歳を過ぎて親

の目が行き届かなくなると今度は上がり始め、思春期スパートの直後あたり、20歳前後で、ぐんと上がる。それは、この時期に心身のバランスが崩れて何か冒険をしたり、トラブルに巻き込まれたり、精神的に病んで死に至るケースが多いからです。重要なことは、この傾向が時代や民族、文化の違いを超えて共通だということです。

要するに、人間の子どもは早く離乳するものの成長が遅い時期があり、さらに脳の成長を優先させた結果「思春期スパート」という時期を迎える。この２つの時期を、母親だけ、あるいは母親と父親だけでは支えられず、家族を超えて共同体が担うようなった。つまり、“共同保育”になったわけです。

人間の赤ちゃんが泣くのは、お母さんが、重たい赤ちゃんを抱き続けていられなくて、どこかに置いてしまうか、他人の手に預けるためです。必然的にお母さんと離れなければならず、泣くのです。ゴリラの赤ちゃんはずっとお母さんの腕の中にいるから泣く必要がなく、不具合や不満を感じたら低くうなるか、ちょっと身動きすればお母さんは気づいてくれます。でも人間のお母さんは気づいてくれないから、一生懸命泣くわけです。そして、その声を聞いた大人たちは自分の子どもでなくても、泣きやませようと努力をする。そして気持ちよくなったら、赤ちゃんはニッコリほほ笑んでくれる。その天使のほほ笑みに、みんなだまされるんですね。それが人間の共同保育の秘密なんです。

まとめてみると、人類の進化史はこんな感じになると思います。まず、熱帯雨林から出て、直立二足歩行を始めた。これは食物を分配し、安全な場所でみんなで分け合って食べることにつながりました。そして、サバンナでは大型の肉食動物に出会い、多産を獲得せざるを得なかった。その500万年後に脳が大きくなり始め、重い子どもを産むようになり、さらに成長の遅さが加算され、共同保育というものが必然となり、共同体と家族という人間の社会の基本的な形ができあがった。これがわたしの結論です。

実は、人間の家族のような集団がサバンナでどのように暮らしていたのかを彷彿させる姿が、ゴリラで観察できたんです。ある１頭のお父さんゴリラが率いる総勢23頭の群れがあって、この中に、ケガで右腕を失った「ドド」という子どもがいました。右腕を地面につけずに歩くので、歩みが遅く、群れからはいつも置いてきぼり。群れが森を出てサバンナを行進して別の森に入ろうとするとき、遅れたドドが群れに追いつくまで、お父さんゴリラが何度も振り返って待っている。そのとき、先に森の中に入っていった若いオスたちも、草むらから顔を出してドドの姿を見守っているんです。お父さんだけでなく、ほかのゴリラもドドのことを心配し、気遣っていた。こういうことは、人間以外には類人猿にしかできないと思うんですね。人間の祖先もこんなことを繰り返しながら、サバンナに進出し、家族の協力体制を強化していったのではないかと思います。

■人間の家族の不思議さを示すさまざまな現象

人間は共同の子育てを通じて、他者をいたわったり助けたりする能力を高めましたが、もうひとつ、高めた能力があります。それは、言葉のわからない赤ちゃんに対して、優しい音楽的な声を出しながら育児ができるようになったことです。優しい声を聞くことで、たとえ赤ちゃんはお母さんの腕に抱かれていなくても、あたかも抱かれているかのような安心感を覚える。そういうことを、人間は始めたんじゃないかと思うんです。おそらく人間が言葉を発するずっと以前から、音楽でコミュニケーションを取る方法はあったんでしょう。それが共同保育の中で出てきたというのが、わたしの仮説です。

いろいろな民族音楽を聞いて感情を揺さぶられるのは、音楽が民族や文化を超えて同じように気持ちを伝えるものだからでしょう。お母さんと赤ちゃんの心をひとつにできたように、音楽によって人間は心をひとつにし、共同で行動できるようになりました。一人では立ち向かえなかった危険に立ち向かい、あるいは悲しみや怒りを分かち合う。これは人間だけが持ち得た、大きな社会的な力だったと思います。それは共同の育児から生まれ、大人の間に普及することによって鍛えられたのではないかと思います。

今、家族が崩壊の危機に瀕していることは、みなさんも日々感じていることだと思います。先ほど原島先生がおっしゃったように、いろいろな家族の形があるため、どんな家族がいいのかわからなくなっています。もちろん、家族の役割がなくなったわけではありません。家族を支えるコミュニケーションの形式が変わったために、家族が見えなくなってしまったんです。これまで家族や共同体では、音楽や身体を使ったさまざまな活動が、人と人との接着剤の役割を果たしてきました。

人間は、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感を持っています。このうち、科学技術によって拡大されたのは視覚と聴覚です。なぜなら、人間が生活する集団の規模が巨大化するに従い、情報を処理する能力を高める必要があったからです。しかし、人と人とを結びつけていたのは視覚や聴覚ではなく、そのほかの嗅覚、味覚、触覚なんですね。それを使ってでしか、人間は信頼関係を紡ぐことができません。もちろん視覚や聴覚を使ってもできますが、それはほかの３つの感覚よりも力が弱いんです。視覚や聴覚は情報は伝えますが、信頼を伝えることはでき

ません。

家族が崩れ始めたのは、いろいろな原因があるのでしょう。少子高齢化で共同の子育てが物理的に困難になったこともあるでしょうし、ファストフードや中食ができて、自分の好きなものを自分勝手に食べることができるようになり、みんなで一緒に食べるという社会的な空間がなくなったこともあるかもしれません。しかしいちばん大きいのは、コミュニケーションが変わったことだと思います。スマホやインターネットなどの電子空間でつきあうようになって、家族が見えなくなり、見えるのが仮想的な集団だけになってしまうと、人間社会は大きく変わるとわたしは予想しています。

家族、あるいは地域社会というものが見えなくなると、個人の行為は、どうしても効率化・経済化・機械化の方向に向かわざるを得ません。家族という、えこひいきが当たり前の、見返りを求めない奉仕をするような集団がいなくなると、人間同士は利害関係で結びつくようになります。つまり、共感能力を使って築いた信頼関係ではなく、自分の利益を高めてくれる相手と一緒にいたり、自分たちの利益をおとしめる人は排除したりする傾向が強まる。そうすると社会が閉鎖的になっていきます。今のアメリカ社会が直面しているのは、この閉鎖した社会への移行だと思っていますが、日本もそうならざるを得ないのではないかという気がします。

家族という観点から考えると、人間は実に不思議なことを行なっています。食事のとき、動物は自分の食べ物をほかの仲間に奪われないようにするし、隠れて食べるものもいます。食は個人的な行為のため、公開されません。その代わり、性は一般に公開して、誰が見ていようと堂々と交尾をします。これが動物のセックスです。人間は、まったく逆です。食事は公開することが基本で、セックスは隠します。人間が動物と真逆なことを始めたのは、「家族」と「共同体」という、編成の異なる組織を両立させるためだと思います。

人間は家族を、見返りを求めない奉仕を中心とした集団として維持するため、“生みの親より育ての親”という原則を作りました。これは、サルから受け継いだ能力です。生まれたばかりのサルは、お母さんを代えてしまうと、生みの親ではなく育ての親を認知して育ちます。そして成長すると、育ての親に対しては性的な衝動を覚えなくなる。これは「ウェスターマーク効果」と呼ばれている現象です。

同じサルや類人猿の仲間でも、オスが子育てをしない社会では、生まれたメスは父親を認知せず、普通に交尾をします。ところが子ども時代に一定時間、オスが親密に世話をするような社会では、メスと育ての親は性的な交渉をせず、ともに避けるようになります。小さいときのケアによって、性的な忌避関係が生まれるわけです。それを人間は、ルールとして社会で守ってきた。これが「インセスト（近親相姦）禁止の規範」というものです。この規範があってこそ、家族と共同体が成り立つ。だから、子どもが結婚して新しい家族を作っても、元の家族との関係を失わず、さらに、結婚相手の家族と自分の家族を結びつけることもできる。これは、人間だけが持っている大いなる能力なのです。

そしてもうひとつ、人間の家族の不思議さを表す現象があります。チンパンジーのメスには人間と同じような月経周期がありますが、排卵の前に２週間ほど、お尻が桃色に膨れます。そして、これを目にしたオスはこのメスに群がり、乱交状態になります。これはチンパンジーだけで、人間もゴリラもオランウータンも、このような特徴は発達させませんでした。そういうなかに、家族というものが作られたのではないかと考えています。

類人猿は、オスとメスがどのくらいの期間、一緒にいるかという点で、長期配偶と短期配偶の種に分かれます。オランウータンは交尾のときだけは一緒にいますが、あとは別々です。ゴリラは、オスが複数のメスと一緒に長期配偶関係を結びます。現代人も特定の男女が長期にわたって夫婦関係を築きます。チンパンジーとボノボだけが乱交型です。この乱交と、発情兆候が表れるという２つの特徴は、チンパンジーとボノボだけにセットになって現れたに違いないとわたしは考えています。

チンパンジーやボノボなどの乱交型は、体重に比べて睾丸が大きいのが特徴です。それは、交尾の相手が特定のメスに限定されないから、オスはたくさん精子を生産して、ほかのオスの精子と競わなければならない。そのため、睾丸が大きくなったんですね。一方、特定のオスとメスが一緒に暮らすような社会を作る種は、オスの睾丸が小さいんです。

ところで、１頭のオスと１頭のメスが夫婦生活を長く送る霊長類の種は、オスとメスの体格がほぼ同じです。ですが、人間は男性のほうが大きい。だから霊長類の常識に従うなら、人間社会の原型はペアではなく、オス１頭と複数のメスか、オスもメスも複数だった可能性が高いのです。

人間の家族というのは、まず親族の集団があり、そこから男性や女性が新しい家族を作って出ていきます。そして重要なのは、個人が集団間を行ったり来たりできることです。チンパンジーやゴリラは、オスもメスもいったん集団を離れたら、二度とその集団には戻れません。つまり、“身体という接着剤”でつながり合っている彼らは、いったんそれが切れ、遠くに行けば仲間の匂いもなく、仲間と接触することもできなくなりますから、集団間の絆は切れてしまう。でも人間は、それをいったん切り離して別の接着剤を持ったがゆえに、行き来ができるようになりました。人間は身体だけで結びついているのではない。これが、人間が、広くいろいろな集団を渡り歩くことができるようになった能力の現れなんです。

■必要なのは直観力や共感力がもたらす「野生の思考」

さて、今日のサブテーマは「ゴリラからAIまで」です。果たして人工知能は家族を作れるのかということについては、ぜひ原島先生にお聞きしたいと思っておりますが、わたしの意見を申し上げますと、AIは食物を食べません。人間は毎日食事を取らなければならず、食事を使って人間関係を維持しています。人間は、食物を社会的な道具として集団を作ってきました。そういうことが、食欲を感じないAIにできるだろうか。そして、相手の食欲を感じながら食物を分配して一緒に食べ、その興奮や満足感をともに味わうことができるだろうか。

もうひとつ、社会を表す重要な要素の性に関していえば、人間は性的欲求を感じるとともに、禁止することもできます。欲求を感じたからこそ禁止というルールを作り、それが、社会的な秩序を維持する自覚につながっています。このようなルールを、AIが作れるか。まずできないと思います。とりわけ、恋愛というのは人間だけが持っている変な感情です。特に、プラトニックラブでは基本的に子孫を作れませんから、生物としてこんなバカげた方向に進化するはずはないんです。でも人間は多大なお金と労力と時間をかけて、成就するかしないかわからない、おそらく成就しない異性に対して、猛烈な情熱を燃やします。これは一体、何なのでしょう。でもこういうことがあるからこそ、人間は生きていける。生きる情熱と恋愛の感情は非常に近いところにありますが、これをAIは感じることができるだろうか。

もうひとつ、AIは子どもを産めません。もちろん男性も産めませんが、しかし高い共感能力によって、また子育てを共同で行うことによって、自分の子や他人の子の区別なく、子どもに対する愛情を感じることができます。そういうことを、AIはできるでしょうか。

さらにもうひとつ、家族と共同体という、相矛盾する論理を持った組織の中には、いろいろな対立概念があります。たとえば、自分の子どもがほかの子どもとトラブルを起こした場合、親としては自分の子どもをかばって、援助したいでしょう。でも組織の中では、あえて自分の子どもを叱る必要もある。「援助」を取るか、「叱責」を取るかを選ばなくてはいけない。これは人間自身が、必要に応じて招き入れた社会の複雑さです。それを乗り切らなければ、人間は家族と共同体という別々の組織を両立させることができなかったのです。そのために人間は直観力と共感力を鍛え、行使してきました。こうした行為を、AIが導き出すことができるだろうか。

わたしは、通信情報テクノロジーというのは、非常に有効なものだと思っています。巨大な都市で生きるには、いろいろな情報を効率的に使い、分析し、賢く使っていく必要があります。そのためにITは重要です。われわれは今、ネットワーク社会という、非常に楽な社会に生きています。ネットワーク社会は、昔のようにしがらみで結びついた社会ではないので、参加しやすく抜けやすいという利点があります。

一方で、人と人が、線でも面でもなく点で結びついているため、信頼関係が醸成できないという欠点があります。ですから、現在のわれわれは不安の時代に生きていると言えるんじゃないでしょうか。今は安全・安心の時代と言われていますが、安全は科学技術でなんとかなります。しかし、いくら安全な環境で暮らしていても、安心は人がもたらすものだから、人との信頼関係が失われれば不安は増幅します。たとえば、実際に和歌山県であったカレー事件のように、安全な食べ物だと思っていたら誰かが毒を入れていたとか、駅で誰かに押されるかもしれないとか。そういう不安を抱えていたら道を歩けなくなるし、電車にも乗れなくなってしまう。

家族や共同体が個人の周囲から消えていこうとしている現在、個人は裸にされ、行政や国家と向き合わざるを得ない。だから、保険や法などで自分を守る。そういう時代に今、われわれは直面しているのではないかと思います。そのときに必要なのは、野生の思考です。つまり、次世代を作るという生物学的な業務に携わっていくにあたり、まだ文明を経験しなかった時代から人間が持っていた直観力や共感力に基づく思考を取り戻すことです。人間はその２つの能力によって、予想外の事態を乗り切ってきたわけですから。そのためには、自然と接することや、過去の経験では判断できない事態をもっと積極的に経験することによって、直観力や共感力を鍛える必要があります。音楽でもいいし、スポーツや食事でも、身体を使っての労働でもいいので、とりわけ視覚と聴覚以外の３つの感性を活用し、人と人との信頼関係をもう少し作り出すことが必要です。

さらに、わたしはこれからの時代を生きるには二重生活もいいと考えています。住民票を２つ持ち、都市と田舎に自分の所在地やアイデンティティを振り分けることです。今の都市は子育てに適当な場所ではないし、老人が生きやすい場所でもない。ですから、都市とは違う場所に、人と人とがつながり合い、共同で子育てができるような場所をしっかり確保し、そこでも権利と義務を行使しながら二重生活をするというのが、これからの賢い生き方ではないかと、そのようにも思います。家族は自然から生まれたものであり、自然と人間との賢い接点になり続けてきた、人間の大きな社会的な力だと思います。それを失ってはならないというのが、今日のわたしの結論でございます。時間になりました。どうもありがとうございました。

山極 寿一（京都大学総長・霊長類学者・人類学者）
1952年東京生まれ。1975年京都大学理学部卒業、1980年同大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学。理学博士。日本モンキーセンター、京都大学霊長類研究所、同大学院理学研究科助教授を経て同研究科教授。2014年10月から京都大学第26代総長に就任。2017年6月から国立大学協会会長、同年10月から日本学術会議会長に就任。ゴリラ研究の第一人者。『「サル化」する人間社会』（集英社インターナショナル）、『家族進化論』（東京大学出版会）、『京大式おもろい勉強法』（朝日新書）など著書多数。

パネルトーク

山極 寿一×大橋 未歩×原島 博（コーディネーター）

■大人たちの振る舞いを見て、子どもは学んでいく

原島　山極先生、どうもありがとうございました。これからはわたしと大橋さんで、共同司会を務めさせていただきます。実はわたし、山極先生のお話は何回かお聞きしたことがあるのですが、そのたびに「あ、そうだったんだ」と思うことがあります。今回で言うと、オスの睾丸の大きさと乱交の関係が非常によくわかりました。けれども、今日はあまりその話には入らないようにしたいと思っております。

最後のところで、AI や IT が家族や人間をおかしくしているというお話がありました。自己紹介をしていないのですが、実はわたしの専門は IT です。厳密には AI は専門ではありませんが、IT と AI は近いところにあります。ですので、なんとなく、「おまえが悪いから家族がダメになったんだ」と、そんなふうに聞こえる話でした。でもこれは非常に重要で、これからますます IT 社会になりますから、その中での人と人とのつながりはどうあるべきか、しっかり考えなければいけない問題だと思います。

さて、今日の話は２つに分けられる気がいたしました。ひとつはいわゆるゴリラ、チンパンジーなど人間以外の霊長類に対して、人間がどのように家族を形成し、それがどういう意味を持っていたか。ゴリラやチンパンジーのように、アフリカの熱帯雨林にいれば幸せだったわけですよね。それがサバンナという非常に厳しい場所に飛び出してしまったために、生き残るための戦略が必要になり、その過程で「家族」というものが出てきた。それがひとつです。ところが、そこには素晴らしい戦略があったはずなのに、人間はその後に現代文明というものを手に入れて、それまで獲得してきた「家族」という戦略と矛盾した生活をするようになったのではないか。そこで、今後どうしたらいいかということになるわけです。それが２つ目です。

そこでパネルトークでも、まず前半は、先生のご専門であるゴリラなど霊長類に関して、人間の家族とは一体何なのかという、なぜそれが必要だったかというテーマで進め、後半は、現代社会において家族がどう変化したのかというテーマで進めようと思います。「やっぱり原島が悪かったよ」という結論になるかもしれませんが……そのような流れで進めようと思っています。

では、まずゴリラのお話について面白かったのは、母親ゴリラからバトンタッチされたあとの、父親ゴリラの子育て。母親とは全然違いますよね。母親と違って腕に抱くのではなくて、ひたすら黙ってじっとして、子どもを背中で遊ばせる姿には、存在感が際立ちます。

山極　ゴリラの子どもは３年から４年お乳を吸いますから、４年から５年おきでしか子どもを産めません。すると、次の子どもを産むときは、前の子どもはすでに母親の元にいないわけですね。基本的にゴリラの母親は同時に複数の子どもを育てません。でも父親は複数のメスから預かった、同じような年齢の子どもたちをたくさん抱えて育てる。ゴリラのお父さんは複数の子どもたちを平等に育てますが、お母さんは１頭のいたいけな赤ちゃんを、とにかく保護して育てることだけに集中します。そこが全然違うところですね。

原島　これから父親の役割というのを話題にしていきたく思いますが、まず大橋さんの立場から感想をお願いします。

大橋　父親のお話で言いますと、先生のおっしゃった「ドド」に対する父親の接し方を見て、つまり子どもたちは父親を通して、社会というか、集団の中でどう生きていくかを学んでいるのかなと感じたのですが、父親にはそういった側面があるのですか？

山極　ゴリラは優劣をつけるのではなく、互いに対等な社会を形成しています。子どもたち同士でのケンカが起こると、必ず父親が介入して、まず仕掛けたほう、体の大きいほうを押さえます。つまり、父親が大きな抑止力になることによって、身体が大きい子どもでも、身体の小

さい子どもに対して優勢にはなれず、対等なんです。だから子どもたちは、父親に頼る。なぜなら、えこひいきをしないですから。そうやって、ケンカを起こすことが悪いことだと覚えていくのですが、それは子どもの成長にとってすごく重要だと思います。

大橋　それは先ほどおっしゃった、組織の中での対立概念という話にもつながりますね。家族の中では優しくできるけれども、それが共同体の中では矛盾するという。

山極　おっしゃるとおりです。人間の場合はやっぱり家族だけだと、どうしてもえこひいきの集団になってしまうので、それを外に開くことによって、子どもの成長を複数の親たちがきちんと見守る。それが、最近までずっと続いてきたと思うんです。父親や母親が、きちんと外の家族と連携し合っていたから、子どもは家族であると同時に“地域のもの”でもあったわけですよね。

原島　今、地域という話が出ましたけれど、確かにわたしの小さいころは、母親にベタベタくっついていると、「お小遣いをあげるから外で遊んでおいで」なんて言われました。今はそんなこと言わないですよね。外で遊んでこいなんて、危なくてしょうがない。

山極　あと、大人同士のつながりが、子どもには見えなくなりました。つまり、大人が職場に行って何かしているのはわかるけれども、会社の人たちを家に連れてこないし、近所同士のつきあいもない。昔は近所のお母さん同士で食べ物を交換したり、一緒に掃き掃除などして助け合う様子が、目の前で繰り広げられていたけれど、今はほとんど見えなくなってしまっている。子どもが大人同士のつきあいの仕方を覚えることができないというのが、いちばん重要な点じゃないでしょうか。

原島　考えてみたら、そうですよね。今は隣の人を知りませんよね。わたしは小さいころは、隣の家に入り浸っていたものですけどね。

大橋　入り浸っていたのですか？

原島　そうですよ。だから隣の家の押し入れに何が入っているか、全部知っていましたよ。それが普通だったんですよ。それが今、ほとんどなくなってきましたよね。先ほど先生が、人間の家族の特徴は複数の家族で共同体を作るとおっしゃいましたが、家族が単独であるのではなく共同体を作るということは、要するに家族同士がお互いを知っているということですよね？

山極　そうです。昔の家はあけっぴろげでしたから、隣や向かいの家で起こっていることが音でも聞こえたし、目でも見えたんです。実は人間の会話の90％はゴシップだと言われています。つまり噂話。あそこの家は夫婦ゲンカしてるよ、とか、ずいぶん子どもを叱ってるね、とか。子どもはその噂話を聞きながら育つことで、何をしたらいいのか、何をしたらいけないのか、何をしたら恥ずかしいのかを覚える。大人たちの言葉やしぐさ、振る舞いなどを通じて覚えていくことが、文化を知る、文化を覚えることだと思うのですが、今はそれができなくなった。

■人間は脳の中にあるものを外に出してきた

大橋　目の前で繰り広げられる情報と、たとえばインターネットなどで目にする情報とは、違うものなですね。

山極　インターネットで見る映像は、自分が身体で経験できるものではないですからね。子どもは、やはり一緒に何かをしなければならないんですよ。お祭りに一緒に出かけ、着飾っている大人たちにウキウキしながらついて歩く、大人たちがケンカをして仲裁する姿を自分もそばで泣きながら見ているとか、そういうことによって、こういうことをしてはいけないのかということを覚えていく。それが学習ということなのですが、テレビの映像は自分がすぐそばで体験できるものではないから、やはり、どうしても“向こうの世界の話”になってしまうんですよね。

原島　インターネットを通じて経験を積んだような気にはなっているけど、実際にはまったく違うということですよね。

山極　それともうひとつは、テレビやインターネットでは、言葉の力が大きくなりすぎてしまうんです。実際に会ってケンカするのと、インターネット上で言葉でケンカするのとでは、激しさがまったく違うわけです。面と向かって「殺してやる」と言われても実際に殺されるとは思わないけど、文字で「おまえを殺してやる」と書かれたら、本当に殺されると思っちゃうでしょう。生の声と、文字に表された化石化した声は違いますよね。

大橋　人類はそういう環境の中で、何百万年にわたって発展してきたけれども、今は転換が行われていると。それは弊害とかゆがみという形で、どこかに出てきているのですか？

山極　人間が進化の過程で一貫してやってきたことは、脳の中にあるものを外に出すことです。見えないものを見せる、聞いてないものを聞かせる、それをずっとやってきた。それが情報通信技術につ

ながっている。たとえば、人間が最初にやったことは食物の分配です。野生動物は、自分が発生源を見ていない食物を信用しない。だから自分の目の前にあるものしか食べません。でも食物の分配というのは、他人に託しているわけですよね。その食物が信用できるかどうかは、その人間を信じることにつながる。食物がどこから来たのか、自分が見ていないものを信じる、想像する。これが、言葉につながっていくのです。言葉というのは、ものすごく効率的なコミュニケーションです。つまり、自然界にあるさまざまなものをカテゴリー化し、石は石として、岩は岩として、小川のせせらぎは流れとして表し、伝える。しかも言葉はポータブルですから、わざわざ石を運ばなくても人に伝えられる。つまり記憶の中にあるものを、言葉に置き換えて運び、人に伝えるということを始めたわけです。それが現在は、どんどん技術が拡大して、世界で起こっていることを同時に映像で見られる時代まで来てしまった。ただ、その映像は、現実に体験できるものとは違います。それをきちんと理解しなければならないと思います。

原島　かなり前に、山極さんから、小さいときに育てていたゴリラと10年ぶりに再会したという話を聞きました。そのときに、相手がじーっと山極さんの顔を見ていたと。要するに、顔をじっと見るというコミュニケーションがゴリラにはあって、それによって、山極さんのことを「あ、自分はこの人を知っている。お世話になった人だ」と思い出したという話でしたね。

山極　あれはね、10年ぶりではなく26年です。

原島　え!?　26年ぶり？　すごい。

山極　再会したとき、最初、向こうはわたしのほうを「何かおかしいな」と思ってチラチラ見るんだけど、まだ思い出してくれなかったんですよ。おそらく、頭の中で昔の経験がぐるぐる回っていたと思うんですが、2日後にまた会ったら、向こうから積極的に近づいてきて、わたしのことをじーっと見つめるんです。そこでわたしがあいさつ音を出したら、向こうが同じように答えた。そこから、彼の顔がどんどん幼くなっていくんです。初めて会ったとき、彼は6歳だったんですが、その当時の自分に戻っちゃった。声を聞くという聴覚的な情報と、見つめるという視覚的な情報によって戻ったんです。そして、それによって、触覚や嗅覚という記憶も戻ったと思うんです。それから彼は、当時わたしと、くんずほぐれつ遊んでいた感覚を取り戻し、近くの子どもをつかまえて遊び始めました。さらに、当時の自分の寝相の悪さを表すように、子どもと同じような寝方をしてみせた。このように、しぐさで示した。身体感覚で昔に戻ったというのが重要なことなのだと思います。

原島　身体というのはある意味では家族の本質なんでしょうね。

大橋　日常的に考えられるコミュニケーションの場は、やはり食卓だと思うのです。けれども今は個食の時代で、スマホを見ながらごはんを食べるのが当たり前になっているため、人の顔や目を見てコミュニケーションを取ることが、なかなか難しいのでしょうね。自分も、下手になっているような気がします。

原島　目を見つめるというのは、けっこう大変なことなんですよ。たぶん、ずっと見つめ合っていると、きっとどこかで目をそらしますよ。人間の場合、じーっと見つめ合うのは難しい。言い換えると、それが顔なんですよ。テレビやスマホを見ながら食べても、たとえばテレビに映っている顔は、ずっと見つめていても全然恥ずかしくない。

山極　それはテレビに映っている顔が、自分に反応してくれないからです。反応し合うことが重要なのですね。

原島　互いにね。

山極　顔というのは、その人の個性とともに気持ちを伝えます。でも相手の顔を読む力というのは、われわれには生まれつき備わっているので、習わなくてもできるんです。だけど言葉というのは意味を伝えるものだから、ちゃんと習わなくてはいけませんね。

原島　それからもうひとつ面白かったのは、音楽の話。まさに音楽というのは感情を共有できるもので、言葉が生まれる前に、親と子や共同体をつなげるものとしてまず音楽があったということですね。

山極　音楽というのは、身体のつながりを補強するものとして現れたのだと思います。なぜなら、言葉を発するための身体的能力ができたのは、人間が二足歩行を始めたからだと言われるんです。立って二足で歩くと喉頭が下に降りて、そこに空隙ができ、音を調節する機能が発達します。だから、ハイハイしている赤ちゃんは喉頭がまだ上にあるので、「あー」とか「うー」とかしか言えないわけです。でも二足歩行を始めると、子どもでも言葉を発するようになる。そういう意味では、人間の子どもは、人類の進化を繰り返しているわけですね。でもわたしは、二足歩行は言葉を話す機能より前に、“踊る身体”としての機能を発達させたのだと思います。なぜなら、立つと、上半身と下半身を別々に動かすことができ、支点が上になるから、踊れる

身体になるんですよ。さらに、四つ足で歩いていると胸が圧迫されますが、二足歩行になって胸が楽になると、いろいろな声を出すことができるようになる。それが歌につながった。歌を歌って身体を同調させることは、とても重要だったと思うんですね。

原島　それを聞いて、これから家族がうまくやっていく秘訣は、家族でカラオケに行くことなのかなと思ったわけですけれども（笑）。言葉でコミュニケーションすると、どこかでおかしくなるということもありますよね。

山極　どんなに立派な政治家でも、ミュージシャン以上に人を集められないです。しかもミュージシャンは、あの何万という大観衆をひとつにできる。これはすごいですよ。音楽の力です。

原島　どんなに立派な大学教授の講演でも無理ですかね。

山極　そうですね（笑）。

■文化と自然との賢い両立が家族の原点

原島　ではここで、現代社会の話に変えたいと思うのですが、基本的に先生のおっしゃる家族の崩壊が始まった現代社会というのは、日本では戦後ということでいいでしょうか。

山極　そうです。戦前はまだ電話ぐらいしかないでしょう。FAXもテレックスも、スマホもインターネットもなかった。まだ人間が生の声で通じ合っていた時代です。映像と聴覚を拡大してしまったことが大きいのかなという気がするんですけどね。

原島　放送業界にいる大橋さんは、責任あるよね（笑）。

大橋　そうですね。ただ先ほどの先生のお話の中に出てきた、AIに家族が作れるかということに関してですが、AIの特徴を見ていると、逆に人間がAIに近づいていっているような気がしてしまうのですよね。生涯未婚率も上がっていますし、たとえば恋愛はしたくない、経済的に合理性がないとか、そういうことを言う人たちも増えてきています。AIと人類は分けられるのか、むしろ、もしかしたらわたしたちの将来の姿がAIなのかもしれないと思ったりもしました。

山極　おっしゃるとおりで、現代の人間の人工的環境は、人間の身体とミスマッチを起こしています。それが慢性疾患や糖尿病、高血圧症などいろいろな身体の病気として現れているわけです。たとえば、人間はもう長い距離を歩かなくなったし、毎日のオフィスでのデスクワークで座っている時間も長くなった。しかもインターネットの画面を見ている時間が長くなり、なおかつ睡眠時間も減っている。視覚をものすごく使っているということです。それから、食べ物もガラッと変わりました。今は炭水化物をいっぱい食べますよね。糖分の多いケーキも食べる。すると、それを処理する肝臓や膵臓の能力が追いつかず、どんどん脂肪に変わって内臓脂肪がたまり、肥満になる。これ、わたしのことなんですけどね。そういうことが、やはり慢性疾患を生んでいるのです。同じことが社会にも起こっているんじゃないかという気がします。

原島　効率化を求めるとだんだん社会自体がAIっぽくなり、人間自体がAIに近づいているということですね。先ほど、AIは性的欲求がない、恋愛ができないという話がありましたけれども、AIは人間に対して恋愛はしないけれども、AIに恋愛している人間はけっこう多いですよ。生の人間は自分の言うことを聞いてくれないけれども、バーチャルだったら聞いてくれるし、ニッコリ笑ってくれる。人とつきあうよりもコンピュータとつきあっていたほうが癒やされるという人が、だんだん増えているような気がします。

山極　人間同士だと予想外の相手の反応がありますが、AIは自分でコントロールできますからね。たとえばAIに、いつでも「わたしはあなたが好きよ」と言ってもらえれば、すごく気分いいですよね。それは、個人の欲求を最大限“発揮させる”ような社会を作るという、今の自由主義社会という方向に合っているから、AIは今後もどんどん発展していくはずです。ただAIは絶対に人間を好きにならず、特別な感情を抱いたりはしません。データを基に「このおじさんはどういうものが好きなんだろう」と解析して、それに合うようなものを出してくるだけです。それは個人にとっては満足を与えるものかもしれないけれど、有害なんですよ。なぜなら、環境と身体のミスマッチというのは、人間が望むものを作り出してきたがゆえに起きたことでしょう。お菓子や炭水化物をたくさん食べて肥満になった結果、自分に跳ね返っていろいろな病気にかかる。だから、それと同じことが起こる可能性があります。自分の望むことをAIが全部してくれるような環境を整えると、直観力も共感力も使わなくて済むし、単に、自分の好きなことは何かを優先させて考えるようになるから、非常に利己主義で、個人主義になって、最終的には社会を壊す行為に結びついていくと思います。

原島　おっしゃるとおりだと思うんですが、AIの研究者の立場から言うと、それは低レベルのAIですね。本来の人工知能、つまりAIは、人間のいちばん素晴らしい知能を真似て、いちばん素晴らしい感性を人工的に作ることを目指している。だからわたしは、人類を滅ぼすようなAIは、低レベルというか、悪AIだと思っているわけですけど、その議論はまた別のときにやりましょう。

山極　大橋さんに聞いてみたいのですが、家族というのは、男性と女性の、どちらの強い志で作られていると思いますか？

大橋　そうですねえ、今日はたまたま、わたしの義理の両親が会場に来ているのですが……（笑）、わたしは女性かな、と思いました。

山極　そう答えていただいて大変うれしいんですけれど、それはこの先、男がいらなくなるということなんじゃないかと思うんです。

大橋　男がいらなくなる？

山極　ええ、つまりIPS細胞などの生殖医療が発達すると、精子を体細胞から作り出すことができるようになるんです。だから女性は、自分が望むような赤ちゃんを、何歳になっても産めるようになる。男なんか、いらないでしょう。男として、わたしはそれを非常に危惧しています。女性が家族を作りたいと思う根底には、夫や父親というのも含まれるとは思うんだけど、それを女性が欲してくれなくなってしまったら、われわれ男は終わりです。男は、女性が欲してくれるように振る舞っていかなくてはいけないですね。

原島　戦後の家族は、男や父親がいなくなりましたからね。父親なしで子育てをするというのが普通になってしまった。ただ、これがもしそのまま進んだら本当に男はいなくてもいい、という結論になってしまう。今日はそれで終わりにしたくないんですけれども。

山極　面白いのは、わたしは昔『ようこそ先輩』というNHKの番組で、母校の小学校に行ったことがあるんです。そのときに6年生のクラスで、男の子に「女の子に好かれるにはどうしたらいい？」と聞いたら、男の子が全員一致で「優しくなることだよ」と言うんです。そこで女の子に改めて聞いたら「強くなくちゃ」と言うんですよ。これ、完璧なミスマッチなんですよね。そういうのが人間社会なんですよ。何が言いたいかというと、相手の望むことをいくら考えても正解にはたどり着かない。原島先生がおっしゃったように、家族にも正解がないんです。おそらくみんな、ミスマッチな家族ばかり作っているんですよ。だけど、それをなんとか自分なりに作り上げていく過程こそが「家族」なんですよね。年を取れば好みも変わっていくし、子どもができればトラブルも増える。でもそれを乗り越えなければ、いや、「乗り越えたい」という気持ちかな、それがないと、家族という、ある意味で生物学的な組織というのは維持できないと思うんです。家族は一面では人間が達した大きな文化だし、もう一面で人間が進化の中で獲得した生物学的な特徴を大いに背負っていることは忘れてはいけない。私の想いです。

原島　今日の先生のお言葉で、共感力というのが非常に印象的だったんですけれども、共感というのは相手があってのことですよね。だから今、共感力がなくなっているとすれば、ひとつはやはり、家族がおかしくなっていることの結果ですよね。

山極　おっしゃるとおりだと思います。特別な相手に特別な共感を寄せるということが、人間の持っているアイデンティティなんですね。わたしは、家族は男と女が作るものだけじゃないと思っています。同性の家族があっても、子どもがいなくても、片親だけの家族があってもいい。大切なことは、特別な共感を寄せる相手を持つことです。そして、そこに存在する年齢差や知識の差を互いに補い合うことが当たり前のように行われるのが家族であって、損得勘定や、利益云々の話は出てこない。それが家族の特徴なんだと思います。

大橋　山極先生のお話の最後に、二重生活というお話がありました。二重生活をして自然に触れるということで得られるものが、共感力や直観力を高める現実的な方法なんですね。今、たとえば土に触れるようなイベントが増えていますけれど、それはわたしたちがどこか潜在的なところで危険を感じていて、それにあらがおうとしているということなんでしょうか。

山極　今、地方創生とか、東京一極集中の解消だとか言われていますが、東京で互いに助け合うような共同体というのは、なかなか作れないと思うんです。やはりこんな巨大な都市だと、効率性や経済性を重視する組織が優先されてしまう。もっと落ち着いた時間の中でしか、人間の持っているゆっくりした生物学的な時間は作れないと思います。だったら東京でそのようなものを無理に作るよりは、ゆったりした時間が流れている地域に求めたほうが得策ではありませんか、と思うんです。それが二重生活のすすめです。

原島　二重生活というと、なんだか、どちらにもいなきゃいけないと思ってしまうんですが、たとえば1.1生活はどうでしょうね。0.1ぐらいなら、気軽にできるかな。山極先生、最後にこれだけはおっしゃりたいということはありますか。

山極　やはりわれわれは、“生物”だということですよね。生物である以上、自然を感じる心を持っている。ですから、それを感じる情緒というものを忘れないでほしいですね。情緒は、すごく大事なものだと思います。赤ちゃんにとって、それを最初に共有できる経験が、親であり家族です。それをしっかり与えなければ、人間はできません。人間は文化的な存在であると

同時に、自然的な存在でもあるから、その両方を子どもにも知ってもらわなければ、きちんとした人間はできないということを忘れないでいただきたいと思います。

人間とゴリラ、つまり文化と自然の世界を半分ずつで生きている立場で言うと、人間が住む文化の世界は、人間がコントロールする、あるいは環境によっては人間がコントロールされる人為的な世界です。そこで人間は、ものすごくこだわりを持つ世界を作ってしまった。そのこだわりがいろいろな弊害を生んでいます。でも逆に言えばそのこだわりが、新しい技術やイノベーションを生み出してきた。一方、ゴリラの世界は諦めのいい、さっぱりとした世界なんです。なぜなら自然環境というのは勝手に変わるから、こだわってはいられず、だから諦めがよくなるんです。わたしは早く向こうに帰りたいという気持ちもあるんですが、大事なのは、文化と自然を賢く両立させていくこと。人間は文化のほうにいるから諦めきれないんですが、そのバランスをこれからどう取っていくか。その原点に家族がいるんだと思っています。ちょっとかっこいいことを言い過ぎましたね。

原島　かっこよすぎて、次回の３回目はどうしようかなと思うわけですが、今回のシンポジウムが家族について考えるいいきっかけになればと思っております。山極先生、どうもありがとうございました。

大橋 未歩

1978 年 8 月 15 日生まれ。兵庫県出身。元テレビ東京アナウンサー。1992 年テレビで観たバルセロナオリンピックで、金メダルに輝いた競泳岩崎恭子選手の姿に感動し「五輪にかかわりたい！」という夢を抱きマスコミを志す。1995 年阪神淡路大震災で被災。3 週間お風呂に入れない生活を経験する。2002 年テレビ東京入社。念願叶い 2004 年アテネ、08 年北京、12 年ロンドン五輪でキャスターを務める。他には『世界卓球』のキャスターやバラエティ番組『やりすぎコージー』などを主に担当。2013 年 34 歳の時に脳梗塞に罹患し 8 ヶ月休養。復帰後は朝の経済番組など報道を主に担当。そして 2017 年、15 年勤務したテレビ東京を退社。現在は第 2 の人生をどう楽しもうか模索中です。

（撮影：中村 年孝）

コーディネーター

原島 博（東京大学名誉教授）

1945 年終戦の年に東京で生まれる。2009 年 3 月に東京大学を定年退職。東京大学では、工学部および大学院情報学環に属して、人と人の間のコミュニケーションを、リアルとバーチャルの両側面から技術的にサポートすることに関心を持ってきた。その一つとして、人の顔にも興味を持ち、1995 年に「日本顔学会」を発起人代表として設立、「顔学」の構築と体系化に尽力してきた。科学と文化・芸術の融合にも関心をもち、文化庁メディア芸術祭審査委員長・アート部門審査員、グッドデザイン賞（Gマーク）審査員などもつとめた。現在は東京大学名誉教授、2015 年 12 月より再び特任教授として東京大学に戻り、全学共通の文系・理系を横断した大学院教養講義を担当している。
公益財団法人花王芸術・科学財団　評議員。

公開シンポジウム
「これからの家族を考える」シリーズ第２回

発行　公益財団法人 花王芸術・科学財団
〒103-8210　東京都中央区日本橋茅場町 1-14-10（花王ビル内）
Tel：03-3660-7055　Fax：03-3660-7994
編集　公益財団法人 花王芸術・科学財団　事務局
発行日　2018 年 2 月 1 日